

月刊

地域保健

1
2010

時代が「保健師」を
求めている

社会が変わる今、何をなすべきなのか

●新春座談会



●FACEBOOK

後閑容子さん

岐阜大学医学部看護学科教授



基礎、基本、希望から生まれる自信と優しさ

今こそ見直したい、広い視野で全体を見る保健師活動

岐阜大学医学部看護学科教授 後閑容子さん

photographs : Sei Kamiyasu

保健・医療の世界で、また保健師一人ひとりと社会との接点に、今年もたくさんの新たな動きが起こります。中でも保健師の養成課程、現任教育を取り巻く課題の展開は見落とせません。保健師活動を改めて考える基点がどこに置かれるか、注目されます。

新春のひととき、人々の健康を支援する基本について思い巡らすのもよいでしょう。岐阜大学の後閑容子先生にお話を伺いました。

古くて新しい問題 「大学とは、4年かけて、何をするところか？」

——後閑先生が今の学生の日常をご覧になつて、実際には大学の4年間でどのくらい看護の基礎ができるとお感じですか。

後閑 大学では、しっかりと基礎を身に付けることが必要です。人の命に向き合う臨床看護の基本には、学ばなければならないことがたくさんあります。

——教育の内容や年限について、再考の必要があるということですね。

後閑 「自分探し」が若いときの課題とも言えます。大学のカリキュラム、体制は、学生がさまざまな分野の勉強をしながら、考える機会を持つるもので

は、なかなか難しいことです。病のある人に広い視野をもつて、専門職として接するためには教養教育も必要です。

基礎的な知識は詰め込むときに詰め込まなければなりませんが、看護で重要なのはそれを応用できることです。

保健師の場合には、どんな視点で地域から情報を集めたらよいか判断したり、ある数値に対しして気づきを持てるかということです。専門的な分野を広げて中途半端にするよりも、ある程度基本的なものを学んだ後は、分野を選択するのも一案かとは思います。

——4年間で基礎的な知識と最低の技術をもつて、臨床で患者さんに受け入れられる看護を提供できるようになるの

——臨地実習ではどのような点に注意されていますか。

なければと思います。科目を自分で選択して学ぶのは、考える第一歩です。

また、友人や学内外の人々との交わ

りによって、自分自身を刺激して高め

る中、自分で考えをまとめる時間を持つことが大切です。現実には、3年生になると専門科目の授業や臨地実習に追われ、考えを消化する時間が持てないようです。

時代が 保健師を

求めている

社会が変わる今、何をなすべきなのか

社会に地殻変動が起きている。「友愛」を理念に掲げる政権が誕生し、平成21年度の日本公衆衛生学会では「健康をまる社会基盤の再構築」が主題となつた。市場原理主義は鳴りを潜め、「勝ち組・負け組」は「絆」に取つて替えられようとしている。SOSを発する人たちの存在を「私たちの問題」としてとらえ、解決に向けて行動する人たちが表舞台に立ち始めている。こうした潮流からは、社会を目指す方向と公衆衛生看護の理念がようやく重なってきたことが窺えないだろうか。保健師的な機能に対する社会の潜在的ニーズは、非常に高くなっているように見える。

新春座談会では、時代・社会の潜在的ニーズを追い風として、地域の保健師の一人ひとりが新しい時代の公衆衛生看護をどう切り開いたらよいのか、全国保健所長会の濫谷いづみ会長を司会に、ベテラン保健師2人にご出席いただき、展望を語っていただきました。



後藤文枝さん
東海市企画部企画政策課
いきいき元気推進担当統括主幹

与儀恵子さん
荒川区福祉部高齢者福祉課
高齢者保健サービス係長

司会
濫谷いづみさん
全国保健所長会会長
愛知県半田保健所長



photographs : Sei Kamiyasu

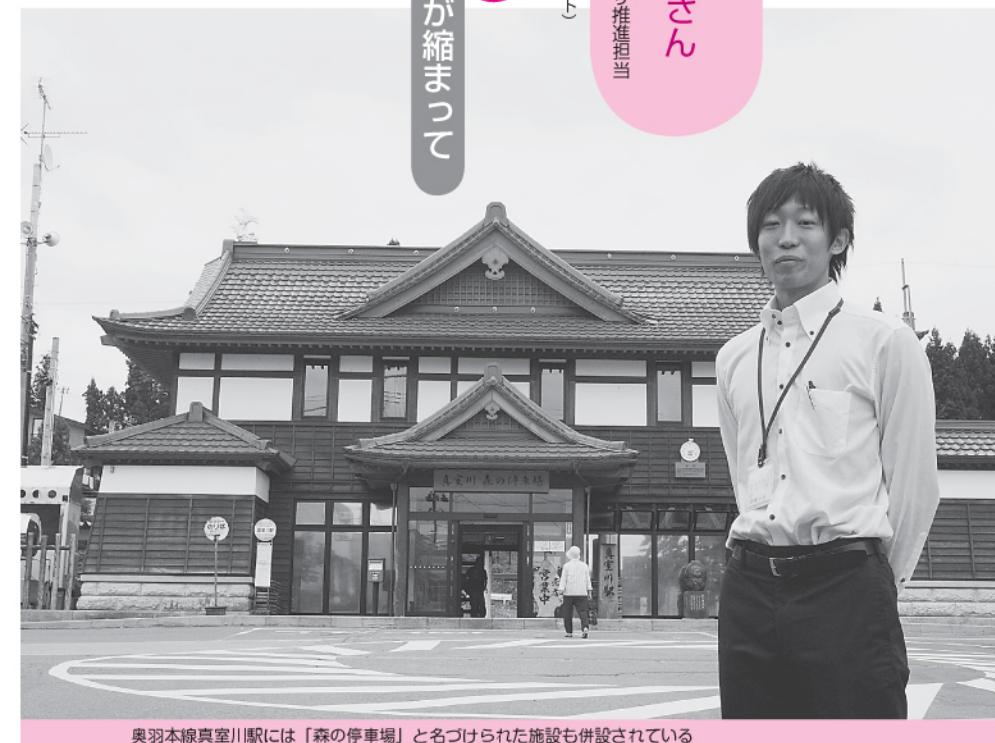
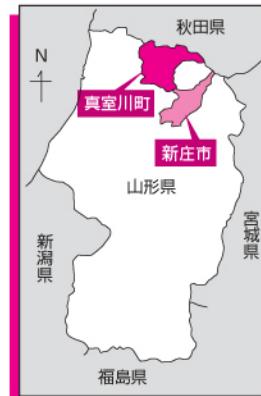
齊藤千宗さん

山形県最上郡真室川町役場 福祉課健康づくり推進担当

●文・写真 西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）

男だけど母子保健もOK

地域に住むことで住民との距離が縮まつて



奥羽本線真室川駅には「森の停車場」と名づけられた施設も併設されている

久しぶりの男性保健師だ。しかも生糞の山形県人と聞いていたので、ちょっととゴツい感じを想像しながら彼が待つ山形県真室川町を目指した。

東京からのアクセスは、羽田から庄

内空港までひとつ飛び。その後はレンタカーで国道344号を2時間も走ればいい……と聞いていた。確かにその通りだった。が、酒田市と真室川町の境にある山道はヘアピンカーブの連続で運転にかなり神経をすり減らす。隣町といえども、山を越えることの苦勞を思い知った。

目的地は健康と福祉の里として町の中枢を担っている「ヘルスケアセンターまむろ川」。ここは町立真室川病院、総合保健施設、高齢者福祉施設が入った複合施設であり、町の福祉課もセンター内に置かれている。窓口に行くと、今回の主人公、齊藤千宗さんにご対面。平成19年度新規採用で25歳。予想していたようなゴツさではなく、逆

に優しい雰囲気を持っている人であつた。

「たばこの害」の話に触発されて

「たたたそうです」

ひとごとのように話す齊藤さん。どうやら、今の自分は子どものころの自分とはまったく違う性格だと分析しているようだ。

医療職に興味を持ったのは両親の影響ではないという。子どものころに人と話をするのが好きだったこと。じいじやん、ばあちゃんに育てられた親の仕事についてあまり理解していなかつた。

「（二人とも忙しく働いていたので）生糞の山形県人と聞いていたので、ちょっととゴツい感じを想像しながら彼が待つ山形県真室川町を目指した。

東京からのアクセスは、羽田から庄内空港までひとつ飛び。その後はレン

タカーで国道344号を2時間も走ればいい……と聞いていた。確かにその通りだった。が、酒田市と真室川町の境にある山道はヘアピンカーブの連続で運転にかなり神経をすり減らす。隣町といえども、山を越えることの苦勞を思い知った。

目的地は健康と福祉の里として町の中枢を担っている「ヘルスケアセン

ターコムロ川」。ここは町立真室川病院、総合保健施設、高齢者福祉施設が入った複合施設であり、町の福祉課もセントラル内に置かれている。窓口に行くと、今回の主人公、齊藤千宗さんにご対面。平成19年度新規採用で25歳。予想していたようなゴツさではなく、逆

活発な子ども時代。遊びもスポーツもたっぷり楽しんだ

